

◆寡黙なブルドーザーの運転手さん
海中から牽引してくれてありがとう

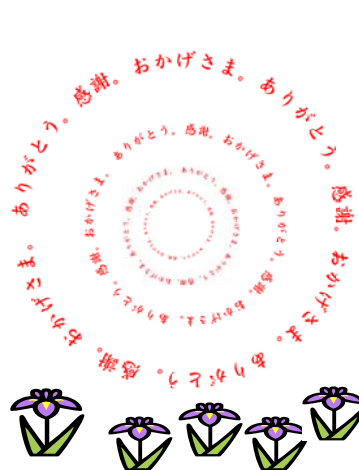
ある夏の話です。そのころ私はフル装備の四駆のついでにいました。多少の悪路でも楽々走りきるその車は自慢の車でした。いつものようにその車に乗って、妻と5歳の息子と海岸線を走って楽しんでいました。息子のぬかるみでも楽々と乗り越えるその四駆を過信していたのも事実でした。その日の砂浜はなんとなく柔らかくそのときは引き潮で遠浅だったのですが「なんとなくいつもと違うな？」という感じはありました。

妻の「陸にもどったほうが良くない？」という静止を「大丈夫：大丈夫：」とふりきって海側に切り込んで「ターンしようとした瞬間：なんと車輪が砂に沈み亀の子状態になってしまいました。しきりにエンジンを吹かし脱出を試みますが、車体はどんどん沈んでしまふ：とうとう車体が砂にうまつた状態になってしまいました。

周辺に居た四駆の車に救助をお願いして3台つないで牽引してもらいましたが、沈み込んだ車は全く動きませんでした。そこは半島の先端に近い場所、近いうちガソリンスタンドでも数キロはある場所でした。日は傾き、潮が満ちてきました。気づくと波は車のボンネットあたりまで迫ってきています。もうドアを開けて降り降りには不可能となり、サンルーフから妻と子供を車外に出しました。

息子は泣き出し、波はどんどん高くなり、とうとうフロントガラスにまで押し寄せています。途方に暮れて考えていると、ここに来る途中に通った3キロほど手前の工事現場にブルドーザーが作業をしていたことを思い出しました。牽引してくれた四駆の方にお願いしてその現場までつれていってもらいました。ブルドーザーの運転手の方に事情を説明して：土下座してお願いすると、現場の監督が快く「行ってあげな！困ってるんだから：」と云ってくださりました。「ワラをもすがる思い」で先ほどの海

岸に戻ってみるとなんと：波は更に高くなり、サンルーフまで届く高さになっていました。潜水してワイヤーを車体に繋ぎ、パニック映画さながらにブルで牽引していただけ脱出を試みますが、潮に採られた車体は更に砂地に埋まりさすがのブルでも上がつって来ません。ワイヤーは伸びきり：とうとう切れてしまいました。啞然とする私。泣き叫ぶ家族。本当に後悔しました。「ローンはまだたくさん残っているしどうしよう？」と愚かなことを考え後悔してあきらめかけていました。寡黙なその運転手の方が今までの倍はあろうかという太いワイヤーを投げつけてよこしてくれました。そのときの運転手さんが神様にみえたものです。



その結果：私の四駆は脱出し、ホットして：車内に入り込んだ砂を掃除して気がつく、その運転手さんはいつの間にか現場を去り、そのブルは遙か彼方に遠ざかっていました。その後姿には私は手を合わせ「ありがとう：ごさいました！ありがとう：ごさいました！」と何度も頭を下げ、自分の行いを悔い反省したものです。どうしてもお礼が言いたくて翌日、その現場を訪れましたが、すでに工事は終わっておりあの運転手の方が誰だったのかとうとう解りませんでした。人は人に助けられて生きていく事を実感させられた夏の日でした。

(渋谷区 Y. Tさん)

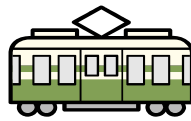


●電車内で席を譲ってください
ありがとうございます

私は足が不自由です。階段の乗り降りが大変でしたが最近では、バリアフリーが整備されエレベーターやエスカレーターの利用により電車での移動が大変楽になりました。更に、優先席があるので席を譲っていただけ有り難いです。以前は、足が不自由な人に席を譲ってくれるのは当たり前のことと思いがつていましたが、ある日主人から「譲ることはその人にとってはとても勇気がいること、有り難いことなのだ」と諭されました。

今までも：席を譲って下さった方に感謝感激の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。そして：そのことを教えてくれた主人に対しても「ありがとう：ごさいます」という気持ちです。

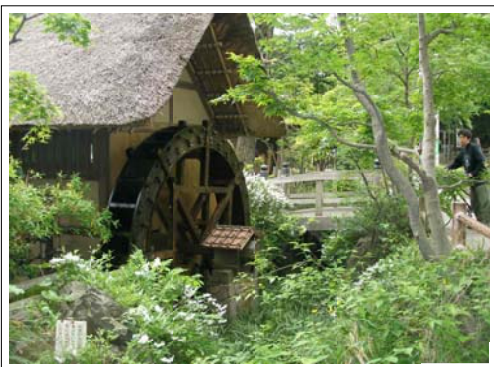
(川崎市/E・Kさん)



●頑張る娘の言葉に：ありがとう

今月、私は誕生日をむかえます。誕生日って、私が両親に対して五体満足に生んでもらい育ててもらったことに感謝し、子供の誕生日には、私たち夫婦の子供として生まれてきてくれたことへの感謝を表す日だと思っています。

そんなことを実感していた頃、新学期から娘が小学生のミニバスケットボールチームのキャプテンになりました。伝統あるチームでのプレー出来る事が親として誇らしい反面、親の役員としての役割負担も多く、娘がキャプテンになった事で、我々一家は、週末は骨休みとは無縁の生活を強いられることとなりました。毎日夜までの練習に加え、毎週末は公式戦：週末ごと自分の時間も無く、妻



深大寺の周辺は萌える若葉が輝き、水の流れて小さな水車を回します。コトコトと杵を打つ槌音に思わず足を止めてしまいます。

も私もイライラする日がつづいておりました。6つ年上の長男も、どうしても週末の夕飯の志度を手抜きになるため、不満を漏らすようになりまし。ついつい私も「お前のバスケットのせいってみんな大変なんだ」と娘にあたつてしまふときもありました。キャプテンになってから一ヶ月が過ぎ、娘は疲れ果てて練習から帰ると我々に言いました。「いつも『ありがとう』。勉強も頑張るし絶対強くなるからね。」そしてその日から、無言で：家の掃除や犬の世話を手伝ってくれるようになりました。私は思わず頭をハンマーで殴られるような衝撃を受けました。「私はなんて恥ずかしい親なんだろう：娘の辛さを理解していなかった。娘だつて練習も辛しい。その中で塾にも通つて：。」「我々親にとつても：この時期は1年しか無いのだし、一緒に楽しませてもらおう」今では、この一瞬を娘と楽しみ、楽しみを与えてくれてありがとうとつて心から思っています。

(横浜市/Y・Tさん)



●母の日プレゼントありがとう！

不思議なんです。地方に嫁いだ娘から、今ちょうど欲しいと思っていた母の日プレゼントが届いたのです。そして私が娘に...と思つて送る物も「何で？今こんなのほしいなあと思つていたらおかあさんから送られたきたから、不思議！お母さん何で知つているの？見えてるの？ありがとう！」つて、電話から歓声が聞こえてきます！



親子つて不思議な力が通じ合うのですね。いつもお互いに「ありがとう...」ありがとう。「お母さんつて凄いな。子供三人も育てて...」と、二人の子供がいる娘。母「あなたがいてくれたお陰だよ。下の二人はあなたがよく面倒みてくれたおかげよ。私一人じゃ育てられなかつたよ。ほんとうにありがとう！」と。これは、娘から電話があるたひの私と娘の会話です。いつも思つてくれてありがとう！そして素敵なお母の日プレゼントをありがとう。(品川区/K・Tさん)

●セブをプレゼントしてくれたおばあちゃん ありがとう

我が家にはペットのダックスフンドの愛犬「セブ」ちゃんがいます。5年ほど前におばあちゃんが息子と娘に買ってくれたのです。子供達は喜んで世話をしてきたものの、1年もすると飽きてしまい結局、我々親が世話をすることになってしまいました。我が家に来て2年目のことです。

その頃、息子は高校受験の大事な最後の夏休みだったのですが、家庭への不満や反抗心から不良グループと係わり生活が荒れておりました。親がいくら指摘しても全く言うこともきかず...どうなる事やらと心配しておりました。

ました。夏休みも終わり、息子も真剣に将来を考え、塾にも通い出すようになったある日、きっかけは解らないのですが、「僕、〇〇高等学院が、その関連校すべてを受験する。それ以外は考えていない」と言いだしました。

学校の進路指導の先生も、親としても万が一の事があるので滑り止めを受験することを勧めますが本人は「俺は素行が悪かったから内申は期待出来ないの、その〇〇高等学院とその関連校一本で行く！」と言ひ張り私たちの云うことを聞き入れません。

それからの息子の集中力はものすごく毎晩、おそくまで電気がついて勉強している息子の部屋をそとから伺うと、「ね、セブ。つきあつてくれてありがとうね。お兄ちゃん頑張るからね」という息子が愛犬「セブ」と会話しているのが聞こえて来ます。息子の部屋で：朝まで一緒に「セブ」はいたようです。その甲斐あつてか：無事息子は受験を終え、希望通りの学校に入学できました。それ以来、息子は機会があることに自分から進んで「セブ」の散歩や世話をしようになりました。息子は愛犬に感謝していました。



その息子も、来年はいよいよ大学生です。我々親も息子から学ばせてもらいました。愛犬「セブ」、息子よ、そして：その愛犬「セブ」をプレゼントしてくれたおばあちゃん「ありがとう」(横浜市/S・Tさん)

●すべてを失った家族を助けてくださった皆さん ありがとう

ある日突然、住む家・家財・お金・すべて失った日から今日まで、どれだけの方々に助けていただいたでしょうか？毎日のように、遠いところから食料・日用品などをたくさんの方が運んできてくださり、お蔭様で家族が生きてこられました。何も言わずに包み込んでくれる

あたたかい会話にも心が癒され、頑張ろうとする気持ちになれたことにも感謝しています。ありがとうございます。また、このお蔭様を皆様にお伝えするチャンスをしたとき、ひと文字ずつ書きすすむほどに本當の有り難さを感じることもできたことに感謝しています。それは：数年前にある出来事によって「すべてを失った」と、どん底の世界にいる自分の運命を嘆いていたことは間違いで、私たち家族を助けてくださった沢山の人の「心」という貴重な財産をいただいていたのです。



●何気ない光景の父母の写真を撮って下さった方に ありがとう

父のことを「秀ちゃん」と呼んでいた母は、糖尿病がひどくなつてからは、本當に父を頼りにして生活してました。病から足が弱まり：白内障で目の方も芳しくなく、外出するときは誰かに手を貸してもらつていくことが多くなつてました。老人会の旅行の時にお仲間撮っていただいた写真だと思ひますが、荷物を片手に持ち、杖をつく母の手を引く父の姿は、いたつて何気ない光景です。お仏壇の前で合唱するとき、脇に飾つてあるこの写真から「不言の言」の空気が心の中に熱く響いてきます。(板橋区/T・Hさん)



- 携帯電話の方はQRコードから →
●パソコンの方は下記のURLから ↓ http://1039.seesaa.net/
●メールでのご投稿は... info@holonics.gr.jp

【編集・企画】株式会社ホロニクス総研・編集部

【原稿をお待ちしています。】

本誌は北海道から沖縄までの友人知人から寄せていただいた「ありがとう」のこぼれに因んだ思ひ出を、作文、詩、俳句、短歌、写真、絵画などを掲載します。作品は編集部までお送りください。投稿いただいた方には、ささやかではございますが、オリジナル「ありがとうメガネ拭き」をプレゼントさせていただきます。皆様からのご投稿をお待ちしております。



また、ご自分のお名前や事業所名を刷り込んで、身近な方やお客さまへ配布されてはいかがですか？是非ご提案がございましたら是非お聞かせください。

